

1 . 「日本語学」とは何か

1 . 1 . 日本語学と日本語問題

母語話者と母語

日本語の母語話者は、特別な訓練や集約的な学習を経験することなく、気がついたら日本語を話せるようになっている。文章表現や話術、あるいは、文字の書写の巧拙には個人差があるものの、けっして日本語が、外国語のように「使えない」と実感することはない。必要な最少限の言語運用能力の獲得は、特別な事情がない限り、すべての人にとって自然に、そして、均質に与えられた先天的な資質である。だから、今さら「日本語」の「学」でもないだろう、ということになる。英語学やフランス語学なら、学習によってその言語が使えるようになる、ということに相応のメリットがあるだろうから、そのための基礎的研究の意義も、おのずから納得できよう。しかし、日本語の母語話者にとって、日本語の文法を「学ぶ」ことにどのような価値があるのか、直ちには実感できないのが普通である。

一般の日本語の母語話者が日本語に関心をもつことがあるとすれば、どうしたらうまい文章が書けるか、うまく人前で話せるようになるか、あるいは、どうしたら字が上手に書けるようになるか、漢字を覚えられるか、敬語が正しく使えるようになるか、といった、一括すれば、日本語の運用技術の向上を意識する場合が第一であろう。珍しい漢字や古いことわざなどについての知識、いわば日本語に関する^{うんちく}蘊蓄の類への関心も、その延長上にある。

次に考えられるのは、いわゆる日本語問題、すなわち、「最近の日本語は乱れている」「美しい日本語を守るべきだ」という類の、日本語の正しさ・美しさが議論される場合であろう。失われゆく方言を、あたかも特別天然記念

物のごとくに扱う感傷的方言擁護論も同類である。文化庁文化語部国語課が平成7年に行った「国語に関する世論調査」では、73.6%の人が「今の言葉は乱れている」に同意している。軍事評論家になるためには、相当の勉強が必要であることはわかっているが、日本語評論家には誰しものが一夜にしてなれるような錯覚さえも存在するように思われる。

「日本語学」はこのような、言語表現技術、言語教育、日本語問題、言語政策などに全く関与しないというわけではないが、基本的には直接的な解答を与えようとするものではない。日本語学の中心課題は、他の言語の研究がそうであるように、日本語を客観的対象として据え、その構造や機能についての規則性を明らかにしていくことにある。全同とはいいがたいが、自然科学が自然界の事象についての規則性を、法則や原理という形で説明しようとするのと似ている部分がある。したがって、日本語の母語話者が外国語を学ぶときと同様に、外国語として日本語を学習する人にとっては、日本語研究にも相応の意義があることは理解できよう。しかし、日本語研究の有用性がそれだけであるとしたら、ほとんどの日本語の母語話者にとっては、ただの無用の長物ということになってしまう。

いわゆる「ら抜き言葉」

ここではまず、日本語問題の一例を日本語研究の立場からとらえなおしてみたい。学校教育やマスコミでしばしばとりあげられる言語事象に、いわゆる「ら抜き言葉」というものがある。「テレビで見られる。」「素早く食べられる。」と言うべきところが、「見レル」「食ベレル」となる事象をさしている。「日本語の乱れ」の極悪犯人として、非難の矢面に立たされることもある。

上下一段活用動詞が可能表現となる時は、「未然形+ラレル」というカタチをとるのが従来の通則であった。「ら抜き言葉」という命名は、「ラレル」の「ラ」が脱落したものである、という認識に基づいている。短い語形の方が言いやすく、経済的であるから変化が起きた、という理由づけの根拠

もその延長上にある。ラ行音の連続が言いにくいから、という理由が付加されることもあり、現代人の話し方が早くなったから、というまことしやかな解説が付け足されることさえある。しかし、もし、短い語形の方が言いやすいから変化が起きた、というのであれば、より長い語形ほど「ラ」が「落ちて」もいはずである。が、実際は「考えれる・試みれる・捕まえれる」とはなりにくい。さらによく観察してみると、「だれかに見られる。」という場合の、受動表現での「見ラレル」は、けっして「見レル」とはならない。したがって、この変化の背後にはまったく別の原理がはたらいている、と考えなければならない。

五段（かつては四段）活用動詞の方には中世後期に、たとえば「読ム」から「読メル」のような可能動詞形が新たに生じた結果、現在では「だれかに手紙を読まれる。」「むずかしい漢字でも読める。」というように、受動表現と可能表現とがカタチのうえで分化している。このことをふまえると、一段活用動詞で可能表現にのみ「見ラレル>見レル」の変化が起きているのは、五段活用動詞に平行させた、意味の分化に対応するためのカタチの分化がこちらにも起きたからである、と解釈するのが穏当な見方である。すなわち、従来は下の左図の体系であったものが、より均整のとれた右図の体系に変化した、ということの意味する。新しい体系では語尾のかたちも、可能表現で-eru、受動表現で-areru、ときれいにそろっている。

	五段動詞	一段動詞
可能表現	読メル	見ラレル
受動表現	読マレル	

	五段動詞	一段動詞
可能表現	読メル	見レル
受動表現	読マレル	見ラレル

五段（四段）動詞の可能動詞形が中世後期に生じたカタチである、ということ、日本語の歴史をさらにさかのぼった段階においては、五段（四段）動詞も可能表現と受動表現が同形であった、ということである。要するに、一つのカタチに負担がかかりすぎていたために、その負担を軽減しようとし

て、可能形を新生する動きが五段（四段）動詞においてまず先行し、数百年後の現在に一段動詞がそのあとを追従している、と考えられる。一方が動いたことによって生じた体系の不均衡を、あらたに修復しようとする動きが現在起こりつつある、ということでもある。

「言語体系」とは、固定された、不動のものではない。均衡をめざしてみずからを調整しつつも、その調整の動きがさらに新たな不均衡を生む可能性を常にはらんでいる。一方では、秩序からの離脱をたくらむ異端分子をも抱えている、永久に流動的な体系である。

外来語の音形

「カタカナ語」といわれる外来語が日本語を「侵」している、というのも、よく聞かれる「美しい日本語擁護論」からの主張である。マスコミにおける外来語の「氾濫」は目にあまるばかりである、という意見に反論することはたやすいことではない。しかし、外来語の頻用と日本語の「乱れ」とは、直接結びつく話ではない。言語は外国語からの影響によって、そうたやすく「乱れる」ものではない。

英語の 'handbag, bed, hotdog' が、外来語として日本語に定着するときに、「ハンドバック・ベット・ホットドック」となることがある。表記には現れにくいかもしれないが、口頭語ではむしろこの方が自然であろう。英語の短母音が日本語で促音に置きかわる原理についての説明は省略するが、ここで注意すべきは、日本語の促音が一般にどのような位置に現れるか、という点を考えることである。

言語の子音の分類の観点の一つに、^{せいたい}声帯の振動を伴って発音されるか、そうでないかによって分けられる、有声音と無声音という対立がある（2.2.参照）。この分類によれば、日本に古くからある和語や、古い時代に中国語から借用した漢語では、促音の次は無声音である、という規則性が見つかる。前掲の英単語も、日本語に取り入れられる際にこの規則の制約を受けて、原語の有声音が無声音に置き換えられたものである、と解釈される。

表面的には外国語によって日本語が変質しつつあるようにみえても、核となる中心部分はそう簡単に変わるものではない。^{ゆうせいりょうしんまさつ}有声両唇摩擦音(2.2 参照)である原語の [v] を意識して、「ヴァイオリン・ヴィーナス」のような表記が容認されるようになったが、口頭での発音が [v] に実現されることはまずない。一方で、「ファン・ティー」などの外来語を通して、「ファ」[fa] や「ティ」[ti] という発音が、新たに日本語に生じたようにもみえるが、これは日本語の音声の体系の「あきま」を埋めたものにすぎない(2.4 参照)。結局は、日本語の側で、受け入れる音と受け入れない音とを選別しているのである。漢語の大規模な借用の影響を受けて、固有の日本語がかなりの変質を受けた、たとえば撥音(2.3 参照)があらたに発生した、といわれることがあるが、「影響」というときの、その内実と質を吟味する必要がある。

母語研究の目的

日本語学とはこのように、日本語の構造や機能に関する客観的データを、日本語の規則性というかたちで明らかにしようとする研究分野である。ある言語の母語話者にとって、自分の言葉づかいに注意することはあっても、母語の構造や機能は、特に意識しない限り、研究対象にはまずならない。日本語学の目的は、意識して日本語の構造や機能を考えることにより、言語によるコミュニケーションのメカニズムの、その一端を明らかにすることにある。言語表現技術や言語生活の向上に、あるいは、言語問題に関する議論に対して基礎的・客観的なデータは提供するが、最終的にそれらは、個人の態度や思想に委ねられた問題である。しかし、個人の主義主張に関わる議論の、その基礎となるような客観的データを、いかにすれば見つけることができるか、という視点を常にもっていることには相応の意義がある。たとえば、「わけの分からない略語や、いかがわしい横文字・カタカナ言葉の氾濫は嘆かわしい」という「主張」は、「『農協』や『JA』はどのような造語の原理によってできた語か」「両者に対して、人々がいだくイメージにはどのような差があるのか」「そのイメージの差を客観的に計測するには、どのような

方法があるのか」という、客観的な観点からの問題としてとらえなおすことができるはずである。

なお、言語の「規則」という言い方は、多分に誤解を招きやすい表現でもある。規則というと、個人の行動を外側から規制する「従わざるをえないもの」としての人為的な法律の類を考えやすいが、言語の規則はそういうものではない。たとえば、本書4.1.「活用」を参照されたい。言語の規則とは、研究者個人や学派の理念・観点・手法に従って解釈され、構築された、いい意味での「虚構」である。もちろん、虚構という言い方に、空疎という含みがあるわけではない。

課題

1. 新聞の投書欄などで、日本語に関してどのような「意見」があるか、調べよ。それが個人の価値観に根ざした主義主張である場合、あらためて客観的研究対象となりうる問題としてとらえ直すことができないか、考えよ。
2. 本節でふれたケース以外に、「日本語を意識した」経験はどのようなときであったか、考えよ。

1.2. 言語の単位と研究分野

文・形態素・音素

研究対象としての言語の、基本的な単位の一つに、文がある。文の定義は、思うほど容易ではないが、今は常識的に考えられる

(1) 明日は雨が降らしい。

というような単位を文と考えておく。文はさらに小さい単位から成り立っている。上の文は、

(2) アシタ | ワ | アメ | ガ | フル | ラシイ

という、六単位からできている。普通には「語・単語」とよんでいる単位で

あるが、たとえば、「菜^こノ花・木^ひノ葉・檜^ひノ木」が、一語であるのか、数語からなる複合語であるのか、厳密には決定しにくい、というように、「語・単語」には認識のずれによる曖昧さが常につきまとう。そこで言語学では、それ以上に分割するともはや「意味」をもつ単位ではなくなってしまうような単位、すなわち、有意義な最小の言語単位として形態素^{けいたいそ}というレベルを考える。(1)の文は六つの形態素から成り、「菜ノ花」は「ナ・ノ・ハナ」の三つの形態素から成る、という言い方をする。

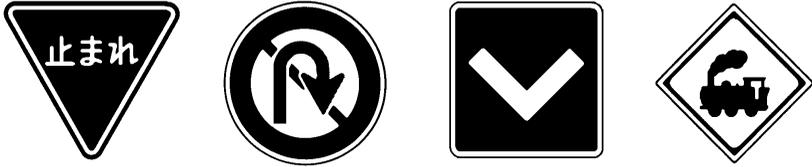
形態素はさらに小さい、それ以上には分解することが不可能な音素^{おんそ}という単位から成り立っている、と考える。たとえば、「アシタ」「アメ」という形態素は、それぞれ五つ、三つの音素（音韻表記については2.2参照）から構成されている。

(3) /asita/ /ame/

以上のように、文は、より小さな単位の二段階の積み上げによってできている。積み上げといっても、その積み上げの結果は時間の流れに沿った線条的な配列として実現されるわけであるから、立体的な構造のようにして実見することはできない。しかし、構造的であることに変わりはない。言語のこのような特性は二重分節性とよばれている。文が分節的に組み立てられていることには、それ相応のメリットがある。

たとえば交通標識のように、「駐車禁止」なら「駐車禁止」という、ある一つのメッセージを伝えるためのカタチが、それ全体でまると「駐車禁止」という意味に対応しているような記号体系は、分節的であるとはいえない。カタチと意味とが一対一に対応する記号体系は、体系全体としては単純であるが、伝えたいメッセージの数に相当するだけの、区別できるカタチを用意しておかなければならない、という制約がつきまとう。ところが、人が伝えたいメッセージの数は無限にある、といってよいのに対して、人が発音できる音の数や、記憶できる語の数には当然限界がある。文が分節的であるということは、限られた数の音素や形態素を素材とし、その素材をその言語に内在化された規則に従って組み合わせることで、伝えうるメッセージの数

は飛躍的に増大するというメリットをもたらすことになる。



交通標識

研究分野

どのような音素や形態素を使うのか、また、どのような配列の規則があるのかは、それぞれの言語によって決まっている。これを、社会的慣習として決まっている、と表現することもあるが、それらの規則性を明らかにしてゆくために、言語研究はいくつかの部門から構成されている。

音韻論・音声学は、言語の音を研究する。音素と形態素との間には、音用論（音素配列論）や形態音韻論とよばれるレベルもあるが、本書ではこれらを一括して、「日本語の音声・音韻」のもとに扱う。形態論は、形態素について研究する分野であるが、形態素はそのままでは実感できる単位となりにくい。定義としては曖昧になってしまうが、日本語学では語彙という用語を使う慣例があり、本書でも「日本語の語彙」として取りあげる。語、より正確には形態素が配列されて文ができるときの、その規則性について研究するレベルは統語論とよばれる。通例はこれを文法論と称しているのので、本書でも「日本語の文法」として扱う。

文はさらに大きい文章という単位になるが、その文章の構造を研究するレベルを文章論という。特定の作家や時代、様式による文章の個性や類型を研究する分野は文体論といわれる。また、通例は文字論・表記論とよばれる文字や表記に関する分野で、日本語は興味深い材料を多く提供してくれるが、これを本書では「日本語の書記」として取りあげる。

以上は日本語という一言語の内部の、いわば各部品について研究する分野

である。言語研究にはさらに、言語と言語外的現実との関係について研究する分野、たとえば、地域や年齢等の要因による言語の変異を扱う方言学・社会言語学や、人間の心理との関係を扱う心理言語学がある。さらに、言語内的研究でも、言語外的現実との相関を扱う研究でも、時間的に歴史を過去にさかのぼって日本語の変化の足跡を研究する歴史言語学（日本語史学）の分野がある。

ただし、このような研究分野の分割は、あくまで研究の便宜として設定されたものである。特定の一分野のみを見てその言語の全体が理解できる、と考えるのは錯覚である。研究者は自分の研究分野を分割された既存の枠に限定する傾向があり、専門研究誌の展望等においても、部門分割があたかも既成の事実であるかのように扱っている。しかし、分割されているのが当然である、という眼をもって見るから分割されて見えるのであり、分割されて見えるからといって、言語それ自体が本来的に分割されていることにはならない。学問や研究における分析と総合という基本的な問題は、言語研究にも当てはまる。

課題

1. 本書は、日本語の「文章論」「文体論」「方言学・社会言語学」「心理言語学」「日本語史学」等については、断片的にふれるのみである。各分野にはどのような研究課題があるか、『国語学大辞典』『国語学研究事典』『国語年鑑』等を参照して、調べてみよ。
2. 日本語と他言語を「比べる」研究には、「比較言語学」と「対照言語学」がある。両者はどのように異なるのか、調べよ。

1.3. 人間の言語の特徴と言語の機能

言語の特徴

一部の動物のコミュニケーションのシステムには、単純な形式の分節性が指摘されているが、人間の言語とは比較の対象にはならないほど単純なものである。人間の言語にとって二重分節性は極めて重要な要素であるが、他にもあげておくべき特徴がいくつかある。

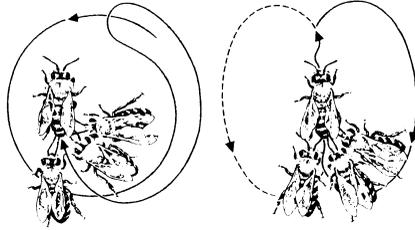
言語記号の恣意性 ^しarbitrariness オノマトペの類を除いて、言語が用いる記号（語）には、形式と意味との必然的な関係が認められないということをいう。「犬」を意味する日本語の記号は/inu/であるが、この形式と意味の関係は偶然であり、英語の/dog/とも合理的な関係は全くない。

線条性 ^しlinearity 言語では音素・形態素などの構成要素を、時間の流れに沿って線的に配列していくことをいう。図表やグラフのように、全体を一括して、一瞬にして表現するようなものではない。書記言語は一見、非線条的にもみえるが、文字記号を線条的に配列していることには変わらない。

生産性 ^しproductivity 文が分節的であり、構造的であることから、記号を入れ替えたり、文の中に文をはめ込んだりすることによって、自分が過去に聞いたこともないような、新しい文が作れることをいう。

超越性 ^しdisplacement 動物が発するメッセージは、その現場の中で与えられた何らかの刺激に対する反応として、現場即応的に出てくるのに対し、人間は伝達の現場そのものに刺激がなくとも、遠く時間・空間を隔てた刺激をもとにした発話が可能であることをいう。そのために、過去に受けた痛みについて語ったり、一年後の夢を語ったり、また、嘘をついたり、現実世界には存在しない想像上の事物について語ったり、あるいは、文学的創造をしたりすることができる。

言語獲得の非人為性 他の能力と異なり、幼児の言語獲得は特別な事情がない限り、その獲得を早めたりするような人為的なコントロールが不可能であることをいう。



ミツバチの「言語」

「円舞ダンス」(左 = 餌場が巣に近いとき)と「尻振りダンス」(右 = 餌場が遠いとき)
(D. クリスタル, 風間喜代三他訳(1992)『言語学百科事典』大修館書店)より転載)

言語の機能

言語はコミュニケーションのための道具である。道具とは一般に、何かの「仕事」をするために特定の役割を果たすものである。言語を発することによって、われわれは何をし、そのとき言語はどういう役割を果たしているであろうか。言語の機能を取りあげる際には、R.ヤコブソン R. Jakobsonの提示した、六種の要素に分析してみるのが考えやすい。

まず、ある発話にはその言語形式が意味するところの内容事物Contextが含まれている。そして、発話の送り手Addresserは、その発話によって自分自身の肉体的・精神的状態を表現する。同時に、その表現によって、発話の受け手Addresseeにある期待する行動を起こすよう働きかけている。

たとえば、「ああ、暑いなあ。」という発話は第一に、この言語形式自体が意味する「自分が暑いと感じているコト」という内容事物を表示する機能を果たしている。そして、話し手自身がそのときに「暑いと感じている」状態を表出したい、という欲求を実現する機能を果たしている。同時に、聞き手がこの発話の趣旨を理解して、たとえば、窓を開ける、という行動を起こしてくれるように働きかける機能を果たしている。このような、内容事物、送り手、受け手に密着した機能を、表示機能(叙述的機能) Referential Function、表出機能(心情的機能) Emotive Function、刺激機能(能動的機能) Conative Functionとっており、この三要素が言語の主要機能である。

次に、挨拶のこトバを交わす場面を想定してみよう。「こんにちは。」でも「ねえ。」でも、挨拶が果たす最も重要な機能は、発話の送り手と受け手とを結びつけ、共通の言語伝達場を設定し、コミュニケーションのチャンネルを開くことにある。このような、送り手と受け手の接触Contactということをも目的とした機能を、接触機能（交話的機能）Phatic Functionという。さらに言語には、その言語自身の記号体系であるコードCodeに言及する機能があり、これを注釈機能（メタ言語的機能）Metalingual Functionという。たとえば、「動詞は『名詞』である。」というときの「名詞」は、日本語の一般的な語、つまり、「日本語そのものに含まれている語」でなく、「日本語について論じるための言語」として使われている。

最後に、谷川俊太郎の詩集『こトバあそびうた』から、「かっば」を例として取りあげてみよう。

かっばかっばらった
 かっばらっばかっばらった
 とってちってた
 かっばなっばかった
 かっばなっばいっばかった
 かってきってくった

この詩は、表現された意味内容や、作者の心情の表出に主眼があるわけではない。語形の取り合わせや連続の妙、アクセントや促音の配置によって生み出されるリズム感、押韻による聴覚的な快さなど、まさに言語の「カタチ」そのもののおもしろさ、巧みさを追求することを目的としている。このような、メッセージMessageのカタチそれ自身の形成を自己目的とした機能を、鑑賞機能（詩的機能）Poetic Functionという。

以上を整理すると、次のようになる。

- A内容事物Context 表示機能（叙述的機能）Referential Function
- B送り手Addresser 表出機能（感情的機能）Emotive Function
- C受け手Addressee 刺激機能（能動的機能）Conative Function

D接触Contact 接触機能（交話的機能）Phatic Function

EコードCode 注釈機能（メタ言語的機能）Metalingual Function

FメッセージMessage ... 鑑賞機能（詩的機能）Poetic Function

このように、言語的伝達の場を構成する六要素のそれぞれに対応した六機能が抽出される。もちろん、個々の発話に必ずすべての機能が対等に発現されるのではない。ある発話にはある特定の機能が際だって発現する、というのが普通である。

課題

1. 動物のコミュニケーションはどのようなメカニズムによって行われているのか、調べよ。
2. 「私は猫と話ができる。」「うちの犬はしばらく放っておくと、寂しかったと言ってじゃれついてくる。」と主張する人に対する、反論の方法を考えよ。
3. チンパンジーに「言語」を教えようとした試みについて調べよ。
4. 言語の六種の機能について、各機能がそれぞれ顕著に発現されている、と思う事例を周囲の言語表現(活動)から探してみよ。
5. 我々の日常の会話で、「話の意味が伝わらない。」「誤解して伝わっている。」と思われる時は、どのような理由からであるか、考えてみよ。

